

## COVID-19禍におけるアニマルサイエンス学科の初期対応

今野晃嗣 大森奈保子 小川家資 小野寺温 加賀谷玲夢 加隈良枝 門多真弥  
川村和美 喜久村徳淑 小泉亜希子 小林豊和 近藤保彦 佐伯潤 佐渡友陽一  
島田将喜 戸澤あきつ 並木美砂子 濱野佐代子 彦野弘一 古瀬浩史  
森恭一 森貴久 山本和弘 山本真理子 柳澤綾 藪田慎司 渡辺隆之

帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科

Education and Research Practices by the Department of Animal Sciences,  
Teikyo University of Science, in response to COVID-19

Akitsu KONO Naoko OMORI Iiji OGAWA Nodoka ONODERA Remu KAGAYA  
Yoshie KAKUMA Maya KADOTA Kazumi KAWAMURA Norihide KIKUMURA  
Akiko KOIZUMI Toyokazu KOBAYASHI Yasuhiko KONDO Jun SAEKI Yoichi SADOTOMO  
Masaki SHIMADA Akitsu TOZAWA Misako NAMIKI Sayoko HAMANO Hirokazu HIKONO  
Koji FURUSE Kyoichi MORI Yoshihisa MORI Kazuhiro YAMAMOTO Mariko YAMAMOTO  
Aya YANAGISAWA Shinji YABUTA Takayuki WATANABE

### 抄録

2020年度の大学教育は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大の抑制と学生の学びの継続の両立という困難な問題に直面することになった。本稿では、2019年度末から2020年度前期中までに帝京科学大学アニマルサイエンス学科の教員が取り組んできた初期対応について報告した。具体的には、教員間での情報共有、学生への情報伝達、遠隔授業、学生支援という4つの項目にまとめ、本学の教育と研究の今後の課題について論じた。

キーワード：COVID-19、アニマルサイエンス学科、遠隔授業、情報共有、学生支援

### 1. 背景と目的

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、SARS-CoV-2と命名されたウイルスによって引き起こされる感染症である。2019年の冬から世界的に流行が拡大し、日本でもその収束の道筋はいまだ見えていない。

こうした「COVID-19禍」とよばれる状況において、大学等の教育機関は、文部科学省の指針に基づいて、感染拡大の抑制と学生の学びの継続を両立させるためのさまざまな対応を行った<sup>1)</sup>。私たち教員も「動じない」わけにはいかなかった。国立情報学研究所の「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」<sup>2)</sup>や、Facebookの大学関係者コミュニティ「新型コロナ休講で、大学教員は何をすべきかについて知恵と情報を共有するグループ（2020年11月2日現在では「新型コロナのインパクトを受け、大学教員は何をすべきか、何をしたいかについて知恵と情報を共有するグループ」と名称が変更されている）」<sup>3)</sup>では、遠隔授業や学生支援のあり方について大学の枠を超えた情報

共有が進められてきた。一方、それぞれの大学はそれぞれ異なる事情を抱えているため、各部署の具体的な対応を記録しておくことは重要だと思われる。

本稿の目的は、COVID-19禍において本学アニマルサイエンス学科が行った取り組みについて報告することである。以下では、本学科が直面した問題を整理したあと、教員間での情報共有、学生への情報伝達、遠隔授業、学生支援という4つの項目に分け、2019年度末から2020年度前期中に本学科が行った「初期対応」についてまとめる。

### 2. 問題の整理（表1）

日本全国、とくに首都圏におけるCOVID-19の感染拡大を受けて、多くの大学等の教育機関は、自宅にいる学生にオンラインで授業を提供する「遠隔授業」を行った。文部科学省は、国立情報学研究所主催「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」の発表に基づいて<sup>2)</sup>、各大学が実践したさまざまな取り組みを紹介してきた<sup>4)</sup>。具体的には、遠隔授業に関する情報を集約したポー

タルサイトを開設したり（東京大学／大阪大学）、ZoomやYouTubeなどのSNSを活用して遠隔授業を実践したり（長崎大学）、新入生向けの学生支援イベントを企画したりする（大阪大学）事例などが、遠隔授業の「好事例」として取り上げられた<sup>4)</sup>。

本学でも2019年度の卒業式や2020年度の入学式が中止されたほか、2020年度前期の授業開始も4月21日に延期された。さらに、前期授業期間において学生のキャンパスへの入構が原則として禁止され、遠隔授業が行われることになった。この状況において、アニマルサイエンス学科では、2019年度末から以下のような問題が共有されており、その解消に向けて各教員が協力して取り組んだ（表1）。

一つ目は、情報伝達に関することである。COVID-19の感染状況の推移は誰にも予想できないため、大学の対応も流動的にならざるを得なかった。4月7日に発令された緊急事態宣言を受け、教員も自宅待機が推奨され、学生もキャンパスに入構できなくなった。こうした状況では、教員間でも学生間でもコミュニケーションが機能不全を起こしてしまうのではないかと、という懸念があった。そこで本学科は、教員間での情報共有（3-1）および学生への情報伝達（3-2）の仕組みの再構築を試みた。

二つ目は、遠隔授業の方法に関することである。大学は学問の場であり、それを支える重要な柱の一つが、教員による授業である。オンラインでの遠隔授業は、学生だけでなく、多くの教員にとっても初めての経験だった。もし遠隔授業を行うときに問題が生じてしまうと、十分な教育内容を学生に提供で

きなくなってしまうのではないかと、という懸念があった。そこで本学科は、各教員の授業の実践例を共有しながら、遠隔授業の質の向上を目指してさまざまな工夫に取り組んだ（3-3）。

そして三つ目は、授業以外の新入生支援に関することである。新入生が大学生活に適応するためには、学生間の交流も重要である。従来であれば、学生は思い思いの「キャンパスライフ」を送り、ほかの学生とさまざまな困りごとを語り合いながら解決していたはずであった。しかし、社会的接触が断たれた状況では、些細な問題であっても一人で解決しなくてはならなかった。そうした「孤独」な環境により学生が過度の不安やストレスを抱えてしまい、学業の継続に支障をきたしてしまうのではないかと、という懸念があった。そこで本学科は、授業以外の学生支援の取り組みにも力を入れた（3-4）。

### 3. アニマルサイエンス学科の実践例のまとめ

ここからは、学科の教員が取り組んできた実践例を具体的に紹介していく。

#### 3-1 教員間での情報共有

まず、教員間での情報共有の仕組みについて取り上げる。

2019年度末から2020年度開始までの期間は、大学全体の方針も流動的だったため、各教員は対応に苦慮した。実際、個人では処理しきれないほどの数のメールが飛び交う一方、教員には周知されない情報もあった。実際、教員にとって重要な情報が埋もれてしまったり、各教員によって把握している情報が食い違ったりする事態も生じてしまった。しか

表1 問題の整理

問題	本稿における節	学科の取り組み
情報伝達	教員間での情報共有 (3-1)	Slack ワークスペースの導入
	学生への情報伝達 (3-2)	学科特設ホームページの開設
遠隔授業	遠隔授業の実践 (3-3)	既存インフラを使った多様な遠隔授業の提供
学生支援	新入生支援の実践 (3-4)	基礎ゼミ
		東京西キャンパスにおける新入生支援企画 ・LINEオープンチャット ・オンライン自習室 ・新入生歓迎イベント
		千住キャンパスにおける新入生支援企画 ・図書館やキャリア支援ガイダンス ・新入生交流会 ・在学生との交流会
		課外活動における学生間の交流促進 ・課外団体活動サイト

も、本学科の特徴として、同じ学科でありながら、千住（東京都足立区）と東京西（山梨県上野原市）という物理的に遠く離れたキャンパスに教員がそれぞれ配属されており、それぞれのキャンパスにおいて事情も異なるという複雑な背景があった。不正確な情報が学生に流れることは、絶対に避けなければならなかった。

そこで本学科は、学科会議やキャンパスごとの会議に加えて、2020年4月から「Slack」というオンライン上のグループワークツールを新たに導入し、学科教員のワークスペースを立ち上げた。そして、Slackの「チャンネル」とよばれる任意のテーマに分類できるメッセージ送受信機能を使い、教員間での情報共有とその整理に努めた。また、Slackでは書類や画像や動画などの各種添付ファイルを共有することも可能で、資料を一元的に管理するという意味でも役に立った。

本学科のSlackワークスペースでは、学科会議、キャンパス会議、ガイダンス、遠隔授業、基礎ゼミ、実習、ホームページ、オープンキャンパスなどの異なるテーマのチャンネルが開かれ、各チャンネルで各テーマを担当する教員を中心に議論が進められた（ちなみに、5月には「Cafe」という雑談用チャンネルも開かれ、そこでの日常生活に関する情報交換は緊急対応時の教員の心理的負担を軽減するのに役に立ったと思われる）。

以上のように、Slackの導入によって教員間での情報共有が進み、各教員がやるべき課題も徐々に明確になっていった。全体のメッセージの件数は2020年9月24日（木）の時点で5,591件に達しており、活発な情報交換がなされたことが確認できた。導入後1か月が過ぎる頃には、意見集約や質問などの細かい議論はSlackで行い、方向性が固まりつつある事項は大学のメールを通じて周知する、という使い分けがなされるようになった。学科会議の場では、Slackでの議論を踏まえた上で最終的な結論を下すことができるようになったので、意思決定も効率的になったように思われた。

本学科では、これまでも学内ネットワークを用いた学科独自の共有フォルダを構築し、それを活用して会議の進行や資料の共有をするなど、キャンパスを超えた情報共有体制が構築されていた。従来の仕組みは大学に出勤しにくい状況では機能しないという問題に直面したが、そうしたこれまでの経験も、新しいツールの導入による情報共有が円滑に進んだ要因だったかもしれない。

### 3-2 学生への情報伝達

次に、学科の教員間で共有された情報を学生に対して届けるため、学生への情報伝達の仕組みについての改善を試みた。

アニマルサイエンス学科の1学年あたりの入学者数は、東京西キャンパスと千住キャンパスそれぞれ約150名ずつであり、学科が抱える学生数が多いという問題があった。従来であれば、大学事務局からの連絡に加えて、「学年担当」の教員が学年全体の学生に対してガイダンスを行い、「助言教員」が一人ひとりの学生と顔を合わせて詳しい説明を行ってきた。また、学務情報はすべて大学構内の「掲示板」を使って周知されていた。しかし、こうした従来の方法は、COVID-19によって使えなくなった。

そこで本学科では、教員有志が2019年度末頃から「新入生応援チーム」を組織して、新入生向けの情報発信の方法と内容について検討してきた。というのも、新入生は大学の公式の連絡手段である学生アカウントメールや学修支援システムにそもそも不慣れで、場合によってはそれらの連絡ツールを使える状況にすらない学生もいたため、学科教員からの情報伝達に困難が生じることが予想されたからである。しかも、年度始めの大学の方針も流動的であり、大学が発信した情報が後に変更される可能性もあった。そうした状況では、学生メール以外の学科の公式な情報を発信するための、新しい媒体が必要に思われた。

具体的な情報発信の場として、本学事務局広報課の後方支援を受けながら、4月7日に大学ホームページの中にアニマルサイエンス学科の「新入生応援ページ」を開設した<sup>5)</sup>。この特設ページの最大の目的は、在学生全員に向けて、学科として重要だと思われる情報を取捨選択して届けることだった。大学からの情報を常にモニタリングし、それを学科の事情に合わせて選択し、情報の修正や追加をしながらページを更新していく作業は、多くの教員による分業により、主にSlackワークスペース上で行われた。

この特設ページの立ち上げ時に重視した点は、ただ情報を発信するだけでなく、多くの学生に見てもらおうようにすることだった。実際、事務方から新入生に郵送される書類に特設ページのURLとQRコードを同封してもらい、必ずアクセスするようにという指示を記載した。そのページにアクセスすると、はじめに学科長や教員の動画メッセージが閲覧できるように準備した。これは、教員の生の声を届

けることにより、学生に関心をもってもらい、このページにアクセスする人数を少しでも増やすための配慮だった。その後、履修指導、時間割例、新入生から寄せられた質問と回答(Q & A)など、確実に届けたい実務的に重要な情報を次々に更新していった。

7月に開催された本学ホームページ部会において、本学ホームページの2019年12月から2020年7月までのアクセス解析の結果が共有された。その報告をみると、「新入生応援ページ」と「在学生応援ページ」の閲覧数は、それぞれ1,572回と3,213回に達していた。生命環境学部のページの中での閲覧数ランキングは、それぞれ19位と12位に入っていた。このことは、多くの学生が当該ページを閲覧していたことを示唆していた。

### 3-3 遠隔授業の実践

次に、本学科の教員が行ってきた遠隔授業の実践例についてまとめる。

本学科の教員は、他の教員との情報交換を継続しながら、各自の工夫のもとで多様な授業を行ってきた。実際、2020年3月末頃から、前期授業で行われるであろう遠隔授業を睨んで、学科教員有志により「サイバーチーム」が結成され、遠隔授業に関するさまざまな情報の収集が進められた。そこで集め

られた有用な情報は、学科のSlackワークスペースで共有され、全教員に周知された。遠隔授業に関する話題は、既存の学修支援システムであるCampusSquareの使用方法の確認から、ZoomやGoogleが提供する外部サービスの活用法、そして学生側から寄せられた意見や質問の報告に至るまで、多岐にわたっていた。こうした背景の下で、各教員は前期の授業中でも、他の教員の実践例を取り入れながら、自らの授業を見直したり改善したりすることができた。4月27日には、学科教員(古瀬)により遠隔授業の実施マニュアル「TEIKAの既存インフラを使った遠隔授業の方法の検討」が作成され、全学に向けて共有された。

以下の表に、本学科の各教員の遠隔授業の方法の概要をまとめた。大きく分けて、授業開講時間に提供される「リアルタイム型授業(表中、リアル)」、授業時間以外でも学習可能な教材が提供される「オンデマンド型授業(表中、オンデ)」、それらを組み合わせた「併用型授業(表中、併用型)」が実施された。各教員がさまざまなツールを駆使して特色ある授業を提供していることがわかった。なお、この表は、各教員の講義系の授業科目に限って、その基本的な授業形式についてごく簡単にまとめたものであり、実習科目やゼミ科目は含まれていない。参考までに付言すると、実習やゼミなどの授業について

表2 本学科の教員による講義系科目の遠隔授業の実践例

番号	形式	授業の詳細
1	リアル	授業開講時間にZoomでリアルタイムの講義を提供。
2	リアル	事前に授業資料を提供。授業開講時間にサーベイモンキーを利用して課題を提示するなどしてリアルタイムの授業を提供。
3	オンデ	Zoomで録画した講義動画をYouTubeに限定公開してオンデマンド化。多数の教員が採用。
4	オンデ	パワーポイントの録画機能で録画した講義動画をYouTubeに限定公開してオンデマンド化。多数の教員が採用。
5	オンデ	ビデオカメラにより講義室での授業動画を撮影し、Youtubeに限定公開してオンデマンド化。
6	オンデ	解説を充実させたパワーポイントの授業資料を提供してオンデマンド化。
7	オンデ	パワーポイントの録画機能で作成した音声付パワーポイントを授業資料として提供してオンデマンド化。
8	オンデ	授業資料が掲載されたウェブページを作成し、Podcastを利用した授業の音声配信とともに提供してオンデマンド化。
9	併用型	ZOOMで録画した講義動画をYouTubeに限定公開してオンデマンド化。授業開講時間にZoomで補助的なリアルタイム授業を実施。
10	併用型	パワーポイントの録画機能で録画した講義動画をYouTubeに限定公開してオンデマンド化。授業開講時間にZoomで補助的なリアルタイムの授業を実施。
11	併用型	解説を充実させたパワーポイントの授業資料を提供してオンデマンド化。授業開講時間にZoomで補助的なリアルタイムの授業を実施。
12	併用型	Zoom等で録画した授業録画をYouTubeに限定公開してオンデマンド化。LINEオープンチャットを使って授業開講時間にリアルタイムで解説や質問への回答を実施。
13	併用型	パワーポイントの録画機能で録画した講義動画をYouTubeに限定公開してオンデマンド化。LINEオープンチャットを使って授業開講時間にリアルタイムで解説や質問への回答を実施。

は、Zoomなどのビデオ通話機能を用いたリアルタイム授業を行っていた教員が多かった。

表に示されているとおり、本学科の教員による前期の授業は、「多様性」に富んでいたといえるだろう。なお、「資料を提示するだけの授業」と広くまとめられることの多い授業形式が、遠隔授業の「悪しき例」としてやり玉にあげられがちだが、決してそうではないことに留意すべきである。むしろ、こうした授業の資料は授業の遠隔化に合わせて大幅に更新されており、学術的な情報の質は高くなっていた。また、各教員は授業の双方向性を保つために、課題の添削やコメントの返信により例年以上に手厚い「個別指導」をしている場合も少なくなかった。学生からも、効率的でよく理解できるという声もあった。

こうして各教員の意見を集約してみると、質の高い遠隔授業を提供するために、個々の教員が多大な労力を払ってきたことがうかがえた。その一方、遠隔授業には、既存の大学教育にはなかった新しい可能性や高い教育効果があることがわかってきた。本学科の教員による遠隔授業に対する肯定的意見を、以下にまとめた。

- 1) フィールドからの中継や他大学との共同のゼミ活動など、物理的距離を超えた特色ある教育が可能になった。
- 2) 授業のオンラインコンテンツ化が進み、学生がオンデマンドで復習しやすくなった。
- 3) 教員により授業の見直しが行われ、教育の内容と方法の大幅なアップデートが進んだ。
- 4) 各種オンラインツールを利用することにより、学生との双方向的コミュニケーションが活発化した。
- 5) 学生はこれからの新しい時代に必要なオンラインの知識や技術を学ぶことができた。
- 6) 障がいをもった学生の学習支援になった(例: オンデマンド講義動画に自動文字起こし機能を用いることにより聴覚障がいのある学生に対して学習しやすい環境を提供した)。
- 7) 心身の不調でキャンパスに通学できない学生の学習継続支援になった(例: 自律神経系の不調や通学不安等の問題で通学できず卒業が遅れている学生が遠隔授業において順調に修学および単位の修得が進んだ)。
- 8) 各科目の教育内容が明確になり、外部からも見やすくなった(例: 他の教員の授業に参加する

ことが容易になり、授業科目間の連携について相互理解が進んだ)。

- 9) 異なるキャンパスでの授業が実施しやすくなった。
- 10) 授業のオンラインコンテンツ化が進んだことにより、それを広報や地域連携などの授業以外の学内外の活動に活用することが期待できる。

各教員は試行錯誤の末、前述の多様な方法で授業を行った。たとえば、LINEやYouTubeなどの学生が日常的に使い慣れたツールの活用は、教員側も手応えを感じていた。また、実際には、学生との個別の連絡手段としても、LINEを含む複数の手段を駆使してようやく学生の個別指導が可能になった例もあった。しかし、PC版のLINEには学内ネットワークが対応していないなどの障害も少なくなかった。

さらに、多様性の高い遠隔授業においては、教員間の提示資料の質や情報伝達手段が均一ではないことが問題点として指摘できた。その原因は、ITリテラシーと表現されるような、教員側の関連機器やテクノロジーについての理解度やそれらを使いこなす能力の差、およびパソコンなどの所有機材の性能の差に起因するものと思われた。たとえば、動画作成などの技術は、一定以上の性能を有するパソコンや編集ソフトを所有していなければ不可能だった。

今後、COVID-19が収束した後も授業のオンライン化への移行は継続することが予想される。学科の教育カリキュラムに遠隔授業を効果的に組み込むことができれば、教育上のメリットは多いと思われる。一方、ITリテラシーの差は、授業の質に多大な影響を及ぼすものである。その高位平準化を図ることは必須の課題ではあるが、経済的な問題を含め、各教員が個々に対応するには限界がある。そのような背景から、機材の導入、プラットフォームの構築、学内ネットワークの整備など、大学としての遠隔授業を支えるシステムの導入が期待される。

### 3-4 新入生支援の実践

最後に、新入生支援に関する取り組みについて報告する。ここでは、基礎ゼミ(3-4-1)、東京西キャンパス(3-4-2)および千住キャンパス(3-4-3)における新入生支援企画、そして課外活動団体との連携(3-4-4)についてまとめた。

#### 3-4-1 基礎ゼミ

まず、学科による新入生向けの初年次教育は、主

に1年生の必修科目である「基礎ゼミ」において行われた。基礎ゼミでは、新入生全体を対象とした「全体会」と、「助言教員の会」に分かれており、学生はそれぞれで大学生活の「イロハ」を学ぶことになる。

学生への個別対応の窓口の一つである「助言教員の会」では、各教員が自分の担当する十数名程度の新入生（助言学生）に対して、大学生活の助言や指導を行ってきた。たとえば、こまめにメールのやり取りを行って履修指導をしたり、大学からの情報を取捨選択してリマインダーをしたり、アンケートなどを実施して問題把握に努めたり、個々の学生の相談に乗って不安解消に努めたり、という多様な支援を行ってきた。今年に限っては、こうした個別指導の場面でもZoomやLINEなどのオンラインコミュニケーションツールが多用されており、学生にとっては、貴重な相談窓口になっていると思われる。このように、各教員は例年以上に学生一人ひとりにきめ細やかな対応を行ってきた。

### 3-4-2 東京西キャンパスにおける新入生支援企画

基礎ゼミでの初年次教育に加えて、今年度はキャンパスごとに特色あるさまざまな新入生支援の取り組みを行ってきた。

東京西キャンパスでは、新入生向けのLINEオープンチャットを開設し、学科の重要な情報を学生に届ける努力を続けた。このオープンチャットには、9月18日時点で履修者138名中113人の新入生が参加しており、学科の情報を効率よく伝達するための一つのチャンネルとして機能しているようだ。

また、2020年7月27日から8月6日までの期間中には、「オンライン自習室」を開催した。自宅で過ごす環境では、学習に対する動機づけを保つことはなかなか難しい。そこで、学科教員の管理の下でZoomの会議室を開放し、オンラインで仮想の自習室を作るという試みを行った。参加した学生は、「同級生がともに勉強している」という気配を感じながら、それぞれの試験勉強やレポート課題を進めることができた。また、自習室の前後には学生が自由に発言できる時間を設けたので、学生はそこで同級生との情報交換を行うこともできた。オンライン自習室には、のべ121名の学生が参加した。

さらに、前期授業期間終了後には、教員有志により、Zoomを用いたオンラインの新入生向けイベントが行われた。従来、東京西キャンパスでは新入生向けのフレッシュマンキャンプという行事を入学直

後に実施しており、学生が一堂に会して互いに交流する機会を提供してきた。しかし、今年度はそれが中止されたため、代わりに、前期授業の終了後の8月7日に「アニマル1年生&教員前期おつかれサマーパーティ！」と題するZoomを用いたリアルタイムのイベントを行った。イベントは本学のフィールドミュージアムOPEN AIR LABの拠点である「ブリコラ」から配信され、学内で暮らす動物たちや施設を案内したり、Zoomのブレイクアウトルームを使って学生間の交流を促したりするなどの企画が行われた。正課外の任意参加のイベントだったにもかかわらず、80名以上の新入生が参加した。

### 3-4-3 千住キャンパスにおける新入生支援企画

一方、千住キャンパスでは、以下のような企画を行った。

まず、基礎ゼミの一環として、当初から図書館やキャリア支援センターと連携し、アニマルサイエンス学科向けの資料配布や動画配信を行った。新入生にとって、今後の学生生活や将来の就職について考えるための有意義な機会になっただろう。

次に、8月3日には、Zoomを用いて新入生対象の「交流会」を行った。149名中123名の学生が参加した。この会では、Zoomのブレイクアウトルームを利用して学生同士が交流できる機会を設けた。こうした企画は学生には好評で、彼らの要望を受けて、8月7日にも同様のイベントを開催した。この日は「アニメ好き」「犬好き」といった持ち込みテーマの部屋とフリートークの部屋の両方を設けた。たとえオンラインであっても、大学で一緒に学ぶ仲間との交流を持ちたいという新入生のモチベーションを感じた機会であった。

さらに、新入生からの要望を受け、9月14日に「後期科目について先輩学生に聞いてみよう！」と題したイベントを開催した。正課外の任意参加のイベントだったにもかかわらず、約80名の新入生が参加した。先輩学生からの話として、前半は2年生6名から、後半は4年生2名と大学院生1名から、後期の共通科目を選択するための助言、資格取得のための要点、大学での研究活動など、自らの実体験に基づいた学生視点からの情報が提供された。参加した1年生からは活発な質問が寄せられ、これに対して即座にリアルタイムで回答できた点も有意義だった。

### 3-4-4 課外活動における学生間の交流促進

さらに、両キャンパスで共通することとして、「課外活動団体サイト」を立ち上げ、部活動やサー

クル等の課外活動に関する情報提供の一元化を行い、新入生と在学生の交流を促進する場を提供した<sup>6,7)</sup>。今後、課外活動が再開されたときの学生の活動の後押しになることを期待して、担当教員と在生が連携しながら、それぞれの課題活動団体の内容や説明会の情報を発信した。

こうした一連の取り組みは、教員が想定したよりも新入生には好評のようで、少なくとも特定の学生間においては大学生活への適応を促進する役割を果たしたと思われた。最近では、新入生有志が自発的にZoomの会議室を立ち上げ、そのURLをLINEオープンチャットで共有し、新入生同士で情報交換を行う場を作るといった試みが継続的に行われているようだ。また、Zoomなどを利用した課外活動団体の説明会なども徐々に開催されるようになり、新入生と在学生の交流も活性化してきた。これは、朗報である。「学科発」の新入生支援が、今後の「学生発」の自発的な活動の創出につながっていくことを期待したい。

#### 4. まとめと課題

本稿では、COVID-19禍における本学アニマルサイエンス学科の取り組みについて、情報伝達、遠隔授業、そして学生支援の3点に絞って記述してきた。最後に、全体の総括と今後の課題について簡単にまとめることにする。

まず、本稿の論点を総括する視点として、当たり前かも知れないが、「コミュニケーションの重要性」について指摘したい。大学の教育と研究は、突き詰めれば個人間のコミュニケーションの問題ともいえる。教員側は伝えたい教育内容をさまざまな信号を使って伝えようとし、学生側はその信号を受け止めようとする。そこでの計画的な情報のやり取りを、「教育」というのかもしれない。私たちヒトは、身振りや手振りなどの非言語的信号をやり取りしながら、相手のヒトと顔を合わせて会話をし、意思疎通を図るよう進化してきた。これまでの対面授業はそうした「自然」なコミュニケーション様式を前提として成り立っていたが、遠隔授業ではそうはいかない。それは教員側にとっても学生側にとっても「不自然」な状況であることは確かであろう。COVID-19によって生じた両者のコミュニケーションのギャップを埋める努力を、私たち教員は今後も継続していきたいと考えている。遠隔授業に対する肯定的な意見の多さは、そうした教員の前向きな姿勢を示している。

最後に、本稿のまとめとして、同じような観点から、今後の課題を一点だけ挙げてみたい。それは、「調整とシミュレーションの重要性」である。今回のCOVID-19への初期対応は、いわば緊急措置であり、その対応は個々の学科や個々の教員に任されてきた。それゆえに、ここで紹介してきた本学科のさまざまな取り組みのように、柔軟で弾力性のある対応も可能になったのかもしれない。一方、教員側の個々の取り組みについて、第三者的な視点から「調整」したり、それを行ったときに学生や教員に何が起きるかを「シミュレーション」したりする仕組みが不足していたように思われた。全学的な調整とシミュレーションがうまく機能するためには、やはり教員と学生だけでなく、事務局職員を含めた円滑なコミュニケーションが欠かせないだろう。その実現は簡単なことではないと思われるが、COVID-19により対面が困難になった状況を逆手にとって、全学的な情報共有や意見集約の仕組みが再構築されることも不可能ではないかもしれない。そうした前向きな方向に議論が進むことを期待したい。

#### 文献

- 1) 文部科学省. 「新型コロナウイルスに関連した感染症対策に関する対応について」>大学・大学院・高専に関する情報」(参照: 2020/11/02)  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/coronavirus/mext\\_00016.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00016.html)
- 2) 国立情報学研究所. 「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」(参照: 2020/11/02)  
<https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/>
- 3) Facebook. 「新型コロナ休講で、大学教員は何をすべきかについて知恵と情報を共有するグループ」(参照: 2020/11/02)  
<https://www.facebook.com/groups/146940180042907/>
- 4) 文部科学省. 「【資料6】大学等における新型コロナウイルス感染症への対応状況について」(参照: 2020/11/02)  
[https://www.mext.go.jp/content/20200917-mxt\\_koutou01-000009971\\_14.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200917-mxt_koutou01-000009971_14.pdf)
- 5) 帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科. 「新入生応援ページ: アニマルサイエンス学科へようこそ!」(参照: 2020/11/02)  
<https://www.ntu.ac.jp/gakubu/seimei/animal/youkoso/>

6) 帝京科学大学 ねこの目報道部. 「ようこそ新入生! 千住キャンパス課外活動団体紹介サイト」(参照: 2020/11/02)  
<http://nekonome.s5.valueserver.jp/senjukagai/>

7) 帝京科学大学 ねこの目報道部. 「ようこそ新入生! 東京西キャンパス課外活動団体紹介サイト」(参照: 2020/11/02)  
<http://nekonome.s5.valueserver.jp/kagai/>